

高槻の秋は暖かく、紅葉の彩も今一つのまま、冬を迎えようとしています。朝夕の寒暖差が激しく、会員のみな様に於かれましては、ご体調の管理はいかがでしょう。私は月末に本山寺・神峯山寺、摂津峡と見て回りましたが、紅葉の色づきはもう一つではありましたが、風情を感じ、わが街高槻もまだまだ捨てたものではないと感じました。先月は、『「高槻名誉市民を考える会」』において、会員の皆様と高碓翁の足跡を辿っています。高槻の往時の歴史と翁の関わりを絡ませながら、研究を進めているところです。今後の高槻の展望の一助になればと心かよわせているところです。(村上)

■西大冠小学校放課後子ども教室(にこにこ広場)で講演

11月4日「高槻の歴史“こんなすごい人いてまっせ!”と題して講演しました。この放課後子ども教室は、西大冠コミュニティセンターで開催され、地域の参画を得て、子どもたちの放課後等における多様な体験、活動を通して、子どもたちが地域社会の中で、心豊かな人間性を養い、生きる力を育む環境を推進することを目的としています。

この日は、我がメンバーが高槻の名誉市民、磯村弥右衛門氏や高崎達之助氏等について、お話をさせていただきました。講師の説明の度に子どもたちは驚きの声を上げ、クイズでは皆が手を挙げて真剣に回答する様子が印象的でした。子どもたちにとって、高槻という郷土に関心や愛着をもつ大変良い機会になったのではないのでしょうか。主催者からも判りやすく子供たちに伝わったというお声をいただきました。



我々もこのように子供たちに先人の功績を伝え、次の時代に繋げていければと思っております。

高槻市民として“誇り”を持ちたいものです。

■「竹の内コミュニティまつり」に展示参加

11月21・22日の両日、竹の内コミュニティセンターで開催されました。この祭りは竹の内地区の日常の活動を報告するもので、書道・絵画・生け花の展示、パソコン教室・講演会などが行われました。開会式において、高槻市民憲章を参加者で読み上げ意思統一をなされていたことには心意気を感じました。

我が高槻名誉市民を語り継ぐ会は展示で参加させて頂きました。内容は名誉市民5名の紹介と我々の行動報告です。

昨年に続き2回目の参加ですが、これからも高槻に根ざした地味な活動で“誇り”を伝えていきたいと思います。



いつでもどこでも参上させていただきますので、よろしくお願い致します。

■「高槻名誉市民を考える会」

11月2日、16日クロスパル高槻で開催しました。10月度に引き続き高碓達之助翁に関し、資料を回し読みしながら各自の情報交換を行いました。本の資料ではなく、現場で収集した情報が中心で、興味のある話になりました。

引き続き12月7日13:30~15:30クロスパル高槻で、高槻名誉市民:高碓達之助翁を考える会を行います。是非ともご参加くださり、先人に学びましょう!!

■『高碓達之助翁を訪ねて』一柱本編

日時:12月21日(月)13:00~16:00

集合場所:高槻市役所総合センター入口前

集合時間:13時(現地には車で移動します)

参加費:300円

申込み締切日:平成27年12月14日(月)

【要項】

柱本公民館で岩田氏(高碓翁の実姉のお孫様、柱本在住)により高碓翁を語っていただきます。

淀川での思い出、選挙に出られたときのこと、胸像設立に関してなどです。

その後、興楽寺(悲母観音像)⇒法光寺(菩提寺、梵鐘)⇒くらわんか船石碑⇒三島鴨神社(翁により再建、三三島)を訪ね歩きます。

高槻の偉大な先人高碓達之助翁を振り返りましょう!!

【新規会員募集中】

会の活動にご賛同いただける会員を募集しています。

年会費 2,000 円です。

是非ともご登録をお願いします。



【高碕達之助第三回講演】の概要

1. 東洋製罐創設

1915年にアメリカから帰国した高碕は、東京で結婚後大阪に戻り製缶会社を作ることになりました。当時の缶詰産業は製缶業と缶詰業を一緒にしていましたが、高碕は缶詰産業を発展させるためには製缶業と缶詰業を分離させる必要があると考え、輸入食品会社社長の小野金六に協力を求め、出資の承諾を得ると共に、小林一三を紹介されました。大阪に戻った高碕は東洋製罐の創業資金50万円を工面するため、缶詰問屋などに「製缶と缶詰を分離することで缶詰業界全体を活性化させる」と説いて廻りました。何とか資金提供の目途が付き、残りは協力者の小野金六が出資してくれましたが、その時ほど苦しかった事は無いと後日語っています。大正6年(1917)6月に東洋製罐を発足、会長小野金六、支配人高碕達之助、相談役小林一三の役員メンバーでした。大阪からスタートした東洋製罐は東京に進出し、その後広島工場、戸畑工場、清水工場を建設し全国企業に成長して行きました。最後は北海道に進出するのですが、独占的に北洋関係の缶需要を握っていた日魯漁業と乱戦になります。しかし、日魯の平塚常次郎は公正な意見を持って事に当たり、やがて東洋製罐と日魯は妥協することが出来、爾来、平塚常次郎とは信義を結び生涯の友となりました。



小野金六



小林一三



平塚常次郎

2. 高碕と満州

企業家として名を知られるようになった高碕は、日産コンツェルンの創始者で当時満業の初代総裁であった鮎川義介の誘いで満州に行くことになりました。昭和14年(1939)5月、鞍山の製鉄所に興味を持った高碕は満州に渡りました。鞍山で調べてみると鋼材は関東軍が全て押さえており、民間に回す余地が無いことが判りました。そこで今度はアメリカ式の大規模農業を計画しましたが、関東軍の横槍が入り中止となります。この時点で高碕は満州を断念すべきで有ったかも知れませんが、高碕に執着した鮎川義介の要請で満業傘下の満州飛行機製造を引き受けることになりました。鮎川は満業の経営が上手く進まない中、総裁の任期が切れると後を高碕に託し日本に帰ります。高碕は迷いましたが総裁を引き受け、戦争が終わるまでの間、50万人の職員を抱えて持ち堪えました。



鮎川義介



鞍山製鉄所

第3回講演記録ビデオ <https://realtimes.real.com/s/iiQHOY>

【高碕達之助第四回講演】の概要

1. ソ連軍侵攻・満州引き揚げ

ソ連軍とは友好条約が有り、参戦は無いと思われていましたが、8月9日未明、新京郊外にソ連軍空軍機が投弾し、満ソ国境を越えて雪崩れの如く侵攻してきました。ソ連兵の略奪、暴行はひどいもので、特に日本人社会を恐怖に陥れたのは女性への凌辱でした。ソ連軍進駐により、政府要人や日本人の軍・政・官上層部は逮捕、抑留されましたが、満業の高碕や満鉄総裁は逮捕を免れました。新京などの都市部では日本人会が作られ、8月末にはそれらを統合する東北日本人救済総会が結成され、会長には高碕が選ばれました。日本人会にとって治安維持と共に、避難民の救済が喫緊の課題で、日本に決死隊を出すことを考えます。2隊に手紙を託し、その内1隊の手紙が日本に届いたようですが、昭和20年の日本は食料不足で、進駐軍の政策にアタフタしていて、とてもではないが満州の事に構ってられない状況でした。高碕は、ソ連軍撤退後に進駐してきた中国国民党軍から産業復興への協力を依頼され、国民党の経済顧問になりました。国民党は日本から賠償を取る為、高碕を3ヶ月の休暇と言う名目で日本に派遣します。賠償物件は広畑製鉄所でしたが、GHQと交渉しているうちに中共軍が大陸の大半を制し、この話はうやむやになり、高碕の帰国は永住帰国となりました。満州で携わった引き揚げ事業は戦後の生活にも尾を引き、引き揚げてきた従業員の再就職まで一生懸命考えていました。



ソ連軍侵攻



広畑製鉄所

2. 電源開発会社総裁として

朝鮮戦争が始まると、戦争特需と産業復活のため電力が不足する状態になりました。政府は「電源開発会社」を創設することになり、高碕がその総裁に任命されることになりました。高碕は総裁として佐久間ダムの建設に取り掛かり、当時最低でも5年かかると言われたダム工事を3年で完成させることに成功しました。この技術は後の黒部第四ダムの建設に引き継がれることになりました。高碕は御母衣ダムの建設にも取り組みます。このダム建設には壮絶な反対運動がおこりますが、高碕の誠意ある説得もあり、反対運動は収まりました。最後まで反対運動を続けていた「死守会」が解散した時、高碕は既に総裁を辞任していましたが、解散式に招かれました。そこで桜の老木に出会い、「これは湖底に沈めてはならぬ。何としても、この桜の命は助けねばならぬ」と強く思いました。「桜博士」と呼ばれていた笹部新太郎氏の協力を得て、昭和35年のクリスマスに移植が終わり、翌年の春には芽吹き、花を咲かせました。そこには記念碑が立ち、高碕の歌が詠まれています。



御母衣ダム



荘川桜

『ふる里は 湖底(みなそこ)となりぬ 移し来し この老い桜 咲けとこしへに』

第4回講演記録ビデオ <https://realtimes.real.com/s/kPAGYY>